

青森県における弥生時代・続縄文時代・ 末期古墳の装身具概要

永 嶋 豊

はじめに

本県の弥生時代の装身具とされるものは、該期の遺跡数同様多くはないため、この集成では弥生時代の可能性のあるものは積極的に拾うこととした。続縄文時代とされる装身具は極めて少なく、現段階では八戸市市子林遺跡と七戸町森ヶ沢遺跡に限られる。所謂「末期古墳」とは、畿内大和勢力の影響下で日本各地で盛んに造営された前方後円墳の終焉（6世紀末頃）と時を同じくして、蝦夷の地で造営された直径十数m以下の小規模な円形の墳墓である。この末期古墳の埋葬主体部の中に、金属製品などと共に多数の装身具が副葬されるが、弥生時代に比して碧玉製管玉がほとんど見られなくなり、新たに瑪瑙製勾玉・水晶製の切子玉・ガラス製平玉（小玉）が主体となる。本稿では弥生時代、古墳時代併行期の続縄文時代、7世紀以降9世紀頃まで造営された「末期古墳」の装身具について触れる。

青森市以西を津軽地域、むつ市・東通村以北を下北地域、夏泊半島のある平内町以東を南部地域として、各時期各地域を概観する。

1 弥生時代の装身具

(1) 津軽地域（図版1）

装身具の出土は、弘前市砂沢遺跡・弘前市宇田野(2)遺跡・外ヶ浜町宇鉄遺跡・田舎館村垂柳遺跡に集中する。弥生前期水田跡検出で有名な弘前市砂沢遺跡では、全て遺構外から勾玉(5)・碧玉製管玉(44)・平玉(23~29)・丸玉(40)が出土している。琥珀製の平玉はこの砂沢遺跡例(157)と垂柳遺跡例(158)に限られる。砂沢遺跡の2km南方の小河川沿いに位置する弥生時代前期の宇田野(2)遺跡では、勾玉(1・2)の他、翡翠製平玉(8~22)が連結した状態で谷地形の捨場から出土した。津軽海峡を臨む台地上に位置する宇鉄遺跡は、弥生時代中期の墓地遺跡である。土坑墓内あるいは土器棺と土坑壁面の間から多くの碧玉製管玉が出土しており、特に第14号土坑内外からは翡翠製丸玉1点(34)と共に総数365個の碧玉製管玉(49~137)が出土している。また第11号土坑墓では翡翠製勾玉1点(4)が副葬品の土器や置き礫と共に出土しており、青野友哉は北海道続縄文時代の南川葬法との類似を指摘する(青野1999)。弥生時代中期の水田跡で有名な垂柳遺跡では、土坑墓内や遺構外から碧玉製管玉(147~156)・凝灰岩製平玉(37・38)に加え、骨角製管玉(162~164)・琥珀製平玉(158)の出土も見られる。

上記4遺跡以外では岩木川流域の五所川原市神明町遺跡土坑墓出土の翡翠製勾玉(3)、大光寺新城跡遺跡の翡翠製勾玉(7)・翡翠製丸玉(32)・碧玉製管玉(45)、垂柳遺跡に隣接する高樋(1)遺跡の泥岩製管玉(46)、小泊半島の坊主沢遺跡出土の碧玉製管玉(146)、平川市五輪野遺跡の土器棺内から出土した貝輪(165)が注目される。

(2) 南部地域 (図版 2)

装身具を出土した遺跡は津軽地方よりさらに少なく、六ヶ所村大石平(1)遺跡と八戸市是川中居遺跡の2遺跡にほぼ集約される。大石平(1)遺跡では土坑覆土中から17点の石製平玉(1~17)が出土した。是川中居遺跡G区の前期末~中期の土器棺と考えられる第4号埋設土器内部からは、赤色顔料や骨粉を含んだ土と共に10個の碧玉製管玉(23~32)が出土した。そのうち半数のものは粗く折り取られた痕跡が報告されている。是川中居遺跡G区では、遺構外から緑色凝灰岩製の平玉(18~20)・丸玉(21)に加え、琥珀製の勾玉(36)や珪質頁岩製ボタン状石製品(37)が出土している。小川原湖に隣接する姉沼に注ぐ沢に面した小山田(2)遺跡では弥生時代前期後半~中期の竪穴住居跡2軒が検出されている。うち1軒の4号竪穴住居跡の炉周辺床面覆土から炭化米約500粒が出土し、住居覆土からは翡翠製垂飾品(35)が出土した。八戸市根城跡の有孔土製品(38)は装身具の他、紡錘車の可能性を残す。

(3) 下北地方 (研究紀要第11号 図版 3・4)

むつ市板子塚遺跡は、陸奥湾に注ぐ河川左岸の弥生時代中期の墓地遺跡である。9基の土坑墓が検出されており、副葬品が見られない他の土坑も墓の可能性が指摘されている。北海道続縄文時代の土坑墓同様に大量の石鏃が副葬され、翡翠(19)・琥珀(13)・緑色凝灰岩製(24)の勾玉、翡翠(27)・緑色凝灰岩(22・23・28・29)・チャート製(30)平玉の他、緑色凝灰岩の垂飾品(14・17・18・20・31・33)が目立つ。同じむつ市瀬野遺跡も陸奥湾に注ぐ河川右岸に位置し、拡張痕跡の残る径10m程の円形竪穴住居跡が1軒検出されている。住居跡覆土から高坏の口縁部突起様に装飾された土版(3-19)と碧玉製管玉(34)が出土している。同じくむつ市戸沢川代遺跡では遺構外から翡翠製のE字形勾玉(25)が出土している。

(4) 弥生時代まとめ

縄文時代以来の翡翠に対する需要は依然残る一方、北海道の恵山文化圏同様に碧玉製管玉が盛んに求められたことが分かる。また翡翠や碧玉などの遠隔地の所謂高級石材の代用品として当地で調達できる緑色凝灰岩・泥岩・土製・骨角製などが用いられた。津軽地方の宇鉄遺跡(中期)、南部地方の是川中居遺跡(前期後半~中期前葉)・大石平(1)遺跡(中期)、下北地方の板子塚遺跡(中期)と遺跡数は少ないが、中期を中心とした墓とされる土坑からの出土が目立つ。中でも碧玉製管玉は是川中居・砂沢・井沢遺跡等の比較的大型の一群と宇鉄・垂柳遺跡等の小型の一群に大きく分けられ、本県を含む東北地方北部では前期~中期初頭に直径6mmを超す大型品の分布が指摘されている(斎野1999)。大賀克彦の研究によれば、弥生時代開始期前後に朝鮮半島から搬入された「碧玉製管玉」の流通が列島内の管玉生産の契機となり、山陰を中心とした中国地方、近畿北部~北陸西部、佐渡を中心とした北陸東部へとその生産開始が段階的に東遷したとされる(大賀2001)。理化学分析(藁科哲男・福田友之1997)や大賀の研究では、佐渡を含む北陸東部地域で製作された碧玉製管玉が東北地方へもたらされた可能性が高いようである。北陸東部の管玉生産は比較的古い例で中期中葉へ遡るようであるが(大賀2006)、本県の弥生時代前期、新しく見ても中期初頭頃に位置付けられる是川中居遺跡G区第4号埋設土器中に副葬された管玉は北陸西部以西からもたらされた可能性を残す。

2 続縄文時代（古墳時代併行期）の装身具（図版 2）

八戸市子林遺跡において、4基の土坑墓が密集して検出された。石製平玉・石製管玉・琥珀製丸玉・ガラス製平玉・鉄釧が続縄文土器などと共に出土している。七戸町森ヶ沢遺跡では20基の土坑墓が調査された。報告書未刊のため詳細は不明であるが、『青森県史 資料編 考古 3 弥生～古代』に土坑墓ごとの出土品表と一部の写真が公開されている。蛇紋岩系の硬質な石材を用いた平玉が卓越し、ガラス小玉・琥珀玉の他に石炭質の埋木を丸玉状にしたものもある。琥珀製のものは勾玉・棗玉・丸玉・小玉等45点出土している。

3 末期古墳に伴う装身具（図版 3～14）

本県の末期古墳ではおいらせ町阿光坊古墳群、八戸市丹後平古墳群・鹿島沢古墳が良く知られる。青森県の末期古墳は7世紀に太平洋側地域で造営が開始され、7世紀末～8世紀前半に増加し副葬・共献品の内容が豊富になり葬送儀礼が確立、8世紀後半～9世紀後半以降津軽地方にも分布を広げた（大野 2005）。

阿光坊古墳群（阿光坊遺跡・天神山遺跡・十三森（2）遺跡）は、7世紀代～9世紀代の造営であり、土坑墓を含めると200基以上の埋葬施設が存在が想定されている（小谷地肇 2005）。埋葬主体部を中心に錫製の環状製品などと共に瑪瑙製・翡翠製・玉髓製の勾玉、水晶製切子玉、碧玉製管玉、琥珀製の丸玉・平玉、ガラス製の丸玉・平玉（小玉）、土製丸玉が出土している。丹後平古墳群と比べて、水晶製切子玉や土製玉類が非常に少ない。

鹿島沢古墳は馬淵川右岸の標高80～90mの丘陵地に立地しており、丹後平古墳群にやや先行し7世紀のものとされる。金環・青銅製釧・ガラス玉・瑪瑙製勾玉・水晶製切子玉と管玉が出土している。

丹後平古墳群は、鹿島沢古墳の南1.5km、馬淵川の右岸の標高80～100mの丘陵尾根部に位置する。金環・鉄製と錫製釧・環状錫製品その他、玉類は瑪瑙製勾玉・水晶製切子玉・土製丸玉と平玉が多く、特にガラス製小玉が卓越する。勾玉は阿光坊古墳群同様にほぼ瑪瑙製に限られるが、碧玉・水晶製も僅かに持ち込まれている。切子玉は水晶以外は用いられず、瑪瑙・琥珀製の棗玉が僅かに1点ずつ見られる。碧玉製管玉は弥生時代と比して激減しており、僅かに翡翠製も見られるが、管玉自体、また玉素材としても碧玉・翡翠がガラス・瑪瑙・水晶に主役の座を譲っている。他に青銅製の中空の玉、所謂空玉が出土している。坂川進の分析によれば、玉が多数出土した数基の古墳においては、勾玉：切子玉：管玉：ガラス玉の比率は概ね1：3：6：80の比率をなし、被葬者の頭部と推定される箇所から集中的に出土することから、首飾りの1セットと考え、良好な出土例からその配列も復元されている（八戸市教育委員会 1991）。また多数の玉類を出土した古墳からは錫釧や鉄釧や環状錫製品といった装飾品が伴う反面、一部を除いて刀類と玉類が共伴することは無く、被葬者の性格の相違が指摘されている。同様の傾向は阿光坊古墳群でも認められる。また末期古墳では、主体部底面付近で出土するものと主体部上位または墳丘部や周溝内で出土するものがあり、前者は副葬品、後者は供献品と考えられることが多い。副葬品には土器は早い段階を除いてほとんど無く、刀類・刀子・釧・耳環・玉類に限定される。連珠用の紐を切られた玉類・折り曲げられた刀子、周溝から打ち欠いたと考えられる土器片が出土することは、該期の葬送観念を表しているのであろうか。主体部の作りの違い、副葬品・共献品の質量にわたる差異が存在することは、時期差に加え被葬者の性格の差異をも示唆しており、蝦夷の社会構造の一端を示している。

『引用・参考文献』

青野友哉 1999「大洞～恵山式土器の墓と副葬品」『海峡と北の考古学』日本考古学協会1999年度釧路大会

大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号

大賀克彦 2006「「碧玉」製玉類の生産と流通」『季刊 考古学』第94号

大野 亨 2005「蝦夷の墓 - 青森県の終末期古墳 - 」『青森県史 資料編 考古3 弥生時代～古代』

小谷地肇 2005「集落と墓域 - 発掘調査成果から - 」『阿光坊古墳群シンポジウム記録集』

斎野裕彦 1999「東北の弥生から見た北海道文化」『海峡と北の考古学』日本考古学協会1999年度釧路大会

八戸市教育委員会 1991『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集

藁科哲男・福田友之 1997「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」『青森県立郷土館調査研究年報』第21号